



## 日本天文学界の大恩人H.M.ポール教授

山 本 一 清

今から凡そ半世紀も以前、我が國の帝國大學（當時は東京に只一つあつた）に天文学部が置かれた時の、最初の教授として、米國からH.M.ポールといふ人が招聘され、明治十三年から同十六年までの3年間、本郷の大學の中で純西洋式の天文学講座が開かれた。此の事は今日の吾が國の天文学界の先輩たちは知つてゐるけれど、若い天文家たち、及至、一般のアマチニアたちは之れを知つて居ない人が多い。此の古い時代の東京大學の天文学科や、大學附屬天文臺が如何なるものであつたかといふ事は、[天文月報]第16卷の第9號、第135ページに、平山信教授の筆なごによつて記されてある。

しかるに此の平山教授の文の中に、一つ、自分の氣にかゝる事は、上記の外人教師 Paul 氏が、[數年前に故人となつた]として、過去帳の中に入れられてゐる事である。ところが、自分の知る所では、此のポールといふ人は、實は今尚ほ生きてゐるのであつて、現に自分は此のポール氏からかつて手紙を貰つたことがあり、最近、ワシントン海軍天文臺長アイクルバーガー (Eichelberger) 教授から自分が貰つた手紙の中にも、[ポール教授は今尚ほ生存してゐる]といふことが書いてある。勿論、此のポール氏は今既に大變な老人で、それに近頃は病臥中で、タイプライターを打つことも困難を感じてゐられるらしいけれど、とにかく、年齢は今、日本流に數へて七十七歳であるから、天文学者の平均年數から言へば、まだ、もつと長生きをせられるだらう。自分は、かつて此のポール氏から貰つた手紙の中にある文により、氏の自作の小傳を下に記す光榮を有す。日本の天文学を

開拓した最初の人の傳記を正しくして、讀んで貰ひたい。

× × × × × ×

ヘンリ・マーテン・ポール(Henry Martyn Paul).

米國海軍(退役)數學教授、ワシントン市現住。——天文學、電氣工學及び機械工學を専門とす。

西曆1851年(ほゞ嘉永四年)6月25日、米國マサチューセツ(Massachusetts)州デドハム(Dedham)市に生れ、デドハムのハイ・スクールの準備教育の後、1869年にニューハンプシャー(New Hampshire)州ハノーヴァー(Hannover)市のダートマス學院(Dartmouth College)に入學。1873年に卒業して Bachelor-of-Arts の學位を得。1875年には土木技師となる。1875年より1880年まで、ワシントン市の米國海軍天文臺の技手(Assistant Astronomer)となり、其の間1878年5月の水星の太陽面經過を觀測するため、ダートマス學院へ派遣され、又、同1878年7月には皆既日食觀測のため海軍天文臺よりの遠征隊に加へられて、米國コロラド(Colorado)州ラス・アニマス(Las Animas)市に派遣せらる。1880年より1883年までの間、ヤング(C. A. Young)教授(ダートマス學院及びプリンストンPrinceton大學の)の推薦により日本へ派遣せられ、日本政府との契約によつて、東京大學の天文學教授となる。1883年(明治十六年)退職して、米國ワシントン市に歸り、再び海軍天文臺の技手に任命せられ、1897年(明治三十年)まで其の地位に在りて、いろいろの天文觀測に従事す。殊に、イーストマン(John R. Eastman)教授の指導の下に主として大子午環を使用し、ヤング教授と協力してプリンストン大學天文臺の經度を觀測し、又、プレヤデス(Pleiades)群の中の二個の掩蔽觀測について月の半徑を測定し、なほ、海軍天文臺の圖書係として數年間働きたり、又變光星の發見及び觀測に1883年から1897年までの間、少なからざる時を費せり。又、1884年にはフィラデルフィア(Philadelphia)市に於ける電氣博覽會の出品物審査官をつとめ、次で、1897年には米國海軍の數學教授に任命されしが、尙ほ天文臺に於いては天文觀測を繼續せり、1897年より1899年頃まで、海軍天文臺の大26吋屈折望遠鏡の電線及び照明装置を完成するため、自ら手を下して多くの仕事をなし、殊に、當時は天文

臺の機械師が病臥中なりしたため、自ら、小型電燈等について或る特殊のもの計畫なごなす。1899年(明治三十二年)、米國海軍省港務部に轉じ、海軍省所轄の所々の港灣に於ける中央電力装置及び消火装置を完成するために力をつくし、1905年(明治三十八年)まで此の業務に留まる。なほ、此の期間、1901年(明治三十四年)には、バッファロ(Buffalo)市に於て開かれたる汎アメリカ博覽會の出品物審査官となる。

1905年(明治三十八年)、アナポリス(Annapolis)の海軍兵學校教授となり、1905年より1912年まで7年間、主として士官候補生第三年級及び第四年級のため數學教官部の一員たり。1912年(大正元年)、海軍兵學校教官を免ぜられ、其の翌年までの一年間、ワシントン市の司法省に於いて、海軍省所屬の諸所の軍港の船渠及び動力部に關する訴訟書類作製に參與せり。

1913年(大正二年)、62歳の定年法によつて退役となる。

著作としては、海軍天文臺から出版されてゐる「ワシントン觀測報告」(Washington Observations)の1875年度から1901年度までのものに載せられてある多くの諸報告のほか、1878年の水星經過や、1878年七月の日食や、月の半徑測定や、プリンス頓天文臺の經度測定なごの四つは、皆、「ワシントン觀測報告」の附録として出版されてゐる。其の他、變光星の觀測なごの、部分的な報告は、Astronomical Journal や Sidereal Messenger や、又、Science なごいふ雜誌にも報告されてゐる。

アメリカ學術進歩會(A.A.A.S.)會員、特に1887年には其のA部の幹事を勤む。又ワシントン理學會(Philosophical Society of Washington)、ワシントン科學院(Washington Academy of Science)、アメリカ天文學會(American Astronomical Society)、メートル協會(Metric Association)、ワシントンのコスモス・クラブ(Cosmos Club of Washington)等の會員である。

× × × × × ×

一讀して、ボール氏の生涯が、如何に活動力に満ちたものであつたかごいふこごがわかる。只、同時代の天文學者として、ヤング、ニウカム、バーナード等の如く派出なごものでなく、専ら「椽の下の方持ち」の如く、地味な方面の仕事をして居られたのであるが故に、其の名は學界に餘り花々しい

ものとして傳へられてゐない。これも時勢の然らしめる所であつたかも知れない。何しろ第十九世紀末のアメリカ天文學界は「天體物理學」の新流行語によつて風靡された時代である。従つて此の時代の流行に逆行して、「舊天文學」の午午線觀測なごやつてゐては、餘り景氣よく思はれなかつたのだらう。しかし、此うしてかくれた功勞者は、何時の世、何時の時代にも、大切なものである。

或る意味から言へば、ボール氏の一生涯中、最も花やかであつた時代は東京に来て、此の新勃興民族の若い學生たちを教育した時代であつたのかも知れない。當時、氏は満29歳乃至32歳の頃であつて、青年學者としての熱心、アムビションに燃へて居た時代ではなかつただらうか？ 此の頃田中館愛橘、隈本有尙、藤澤利喜太郎等の人々がボール教授の講義を聽講されたのであつて、此等の若い學生たちが、如何に大なる興味を以つて氏の講義を聞いたかといふ事は「天文月報」中の平山氏の文にも現はれてゐる。尙ほ、此の時代の東京大學天文臺にクラーク製の赤道儀を始め、多くの米國製の天文器械があつたことや、又、歐洲の Bessel や Argelander 等の巨人の書物なごが東京へ輸入されたのは、皆此のボール氏の盡力であつたらしい。

ボール氏は今病を養ふて、ワシントン市オンタリオ・アパートメントに居住してゐる。(終)

## 新しい大彗星發見

去る12月17日、コペンハーゲンにある國際天文電報中央局からの來電によれば、南阿ケープ天文台の Skjellerup 氏は最近新彗星を發見した由、光度が2等級の由であるから十數年來の珍しいものであるが、位置が太陽と同方向であるため、京都でも東京でも未だ見えない。19日にもまた中央局から軌道の電報が來た。此等の軌道要素を掲げるに、

拋物線軌道要素	Wood 氏の算出	Dawson 氏の算出
近日點通過の日時	1927年12月1.192	1927年12月18.2 (萬國時)
近日點引數	323度 29分	20度 58分
昇交點の黃經	79 20	78 43
軌道面の傾斜角	72 10	82 41
近日點距離	0.6058	0.9230

此の二種の軌道には大變な違ひがあつて、何れが眞に近いかわからない、Wood 氏のが正しければ、二月頃毎夕の白鳥座附近の西天に見える筈であるし、Dawson 氏のが好ければ、一月の中頃以後、毎日早朝東天の蛇座に見える筈である。詳しくは本會の BULLETIN を見よ (12月22日記)